

始まりのブザーが鳴るまで問題冊子、解答用紙に手を触れずに、
左記の注意事項に目を通しておくこと。

- ◎ 問題用紙は1ページから16ページまでであるので、始まりのブザーが鳴ったらすぐに確認すること。
- ◎ 最初に別紙の解答用紙に受験番号と氏名を記入してから問題を解くこと。
- ◎ 受験番号は所定の欄に記入後、それに該当するマーク欄にしっかり濃くマークすること。
- ◎ 解答はすべて解答用紙の所定欄からはみ出さずに記入すること。
- ◎ とじてある問題用紙をばらばらにしたり、一部を切り取ったりしないこと。
- ◎ 終了のブザーが鳴ったら筆記用具を置くこと。
- ◎ 問題冊子は持ち帰ってもかまわない。

受験番号マーク例

良い例	●	悪い例	✓ ○ ●
-----	---	-----	-------

◎選択肢のある設問は、最も適当なものを選んでその番号を記すこと。

◎字数指定のある設問は、句読点や記号も一字とする。

【一】次の文章を読み、後の問に答えよ。

このところ、意識についてずっと考えている。ずっともやもやとしていたら、このあいだの夜、まどろみながら説明を見つけたような気がした。

僕で考えている意識とは、クオリア^注ではなく自己意識である。自己意識とは、自分のことを第三者視点で見ている自分のこと、つまり自分を自分であると認識している意識のことである。僕らはみな、頭の中に自己言及的な声を持っているし、目を閉じればそれをよりはっきりと感ずることができる。では、その意識とはどう説明できるのだろうか。

単なる反射行動だけで生きている動物は、自分が自分であるという意識を持たないと言われている。僕はずっと、人間と対話できるようなアンドロイドを作ってきたが、今のところ、そうしたアンドロイドが意識を持っているとは考えていない。

しかし、アンドロイドを複雑に作っていけばいくほど、どこかで自己意識のようなものを与えないと、動けなくなる時が来るのではないかとも思っている。意識がなければ超えることのできない、高い「壁」のようなものがあるのではないか。

自己意識をできるだけ単純に、機能的に理解するならば、それは A を B する主体だと思う。経験を積みばどんどん蓄えられる記憶、しかしそれら多くの記憶に同時にアクセスすることはできない。「私」という記憶の参照者が、記憶の発生とともに頭の中に現れて、それが順次記憶をたどっていく。おそらくこれがもつとも機能的な自己意識の理解だろう。

しかし意識には単なる記憶の参照者以上の役割があり、人間の複雑さの根本的な要素になっているように思う。

では、自分の記憶をもとに世界をモデル化し、そのモデル化された世界でいろいろと言葉で考えるような意識や、頭の中に自分の声が響いているようなアンドロイドは、どうしたら作れるのか。

できる。コンピュータに限らず、僕らは世界全体をそのように時間固定的に記憶しており、これは世界が脳内でモデル化されているというものである。

もし、さつきあったものが今でもあると信じられなければ、ずっと見てなくてはいけない。すると今起こっていることすべてに注意を払わなくてはいけない。それは膨大な情報量なので、観察できる世界はすごく狭くなる。複眼で世界をずっと観察し、注意を払い続ける昆虫のようなものだ。つまり、現実世界で自分が感覚したものが、「c」（現実世界へばりついた時間）から切り離されることで、記憶という「自分が d 世界だと信じているもの」が作り出されているわけだ。

実際に、記憶の時間感覚はデタラメだ。強い記憶は近いことのように思うし、近いことでもすぐ忘れてしまうこともある。今日の朝に何を食べたかはすぐ忘れるけれど、一年前の感動的な料理は憶えている。嫌なことはよく憶えているという人がいるのはまさにそういうことで、重要なものだけが強い印象で憶えられていて、前後の時間概念は簡単には出てこない。

つまり記憶とは一見、時系列的なものに感じられるが、記憶における「それがいつだったか」は、じつは瞬時に答えられるものではなく、あの時こうしたからこうなっているはずだというように、ほかのエビデンス（証拠）と関連づけることによって、ロジカルに推論されているものにすぎない。だからもし、そういう情報が一切含まれていない記憶があるとすれば、それがいつだったのかは分からなくなるはずである。夢の中が「いつ」だかわからないように、記憶は時間から切り離されている。

電子回路のメモリーは、フリップ・フロップという回路で作られるが、ここでは入力と出力がつながっていて、ループを構成している。人間の記憶のメカニズムも同じなのではないだろうか。入力と出力がつながることで、神経回路がループを起こし、「今ここ」という現実世界の時間から切り離される。すなわち、記憶するとは時間を消す、ということである。

ここでは、記憶とは自己以外のものが「ある」（机があるとか、あなたが存在するとか）という客観性（とわれわれが信じているもの）、意識とは、その客観世界の中で「自分」をシミュレーションする機能のこととする。その世界の情報を取り出し、使うためには「行為主体」が必要となるが、それが自己意識である。すなわち、自分の主観的観測を積み重ねて、それが「客観世界」であるというモデルを作り上げる。そして、それは同時に、その客観世界で「主観的観測を行なう自分」をシミュレートすることであり、このシミュレーションを行なう自分こそが自己意識である、ということだろう。

現実世界に流れ続ける時間と、それに伴う膨大な情報の流れを脳内モデルとして固定するという機能こそが意識や記憶の役割ではないか。

長い記憶がなければ、自分とは何者かを説明しにくい。昨日と今日の自分が連続していると信じられなければ、アイデンティティは築けない。しかしながら、小学校のときの自分と今の自分の自己意識は同じではないし、つながってもいないように思われる。

意識は果たして連続的なのか、という問題は科学的にも議論されており、「非常に瞬間的な（○・一秒ほどの）短期記憶」と「近未来の予測」がひたすら連鎖しているものが意識の正体であるという説もある。

では、この瞬間の連鎖がいかにして、生まれた時から同一人物として続いている「自分」になるのか。それが時間を消すことなのであろう。僕たちは時間概念を捨てることで^④普遍性（記憶）を獲得し、昨日から明日へ続く自己（意識）を獲得しているのである。

時間というのは現実世界のもっとも大きな制約である。そして普遍性とは、時間に縛られないことである。その制約を取り払って普遍性を作り上げることが自己を形成していく、ということだとしたら、それはまるで、三次元世界を生きるものたちが、この一方向的な時間^⑤に縛られた世界を克服しようとしているかのようである。

この実世界を技術によってさまざまにモデル化してきた人間が、いまだモデル化できないものが時間である。意識とは何かをいまだ説明できないのも、時間と意識が密接に係っているからだろう。だから時間を克服する⇨モデル化することが、三次元世界を完全に克服するということである。その克服の道程に、人工的な意識の生成があるのかもしれない。

人間は観察によって世界の脳内モデル（記憶）を作り、それをベースに自己意識を作り上げる。一瞬ごとにすべてを観察し続けなくても生きていけるのは、この部屋はこんな感じだとか、自分が住んでいる世界はこうだという部屋や世界の脳内モデルがあるからである。それは、時間と関係なく存在することを信じられる普遍的なモデルである。

だからアンドロイドに意識を持たせようとしたら、時間から自由になるための装置⇨脳をいかに作るかを考えねばならない。

そこで重要なのは、何より、その装置が現実世界で生き続けることができるかである。それは、時間の変化に即した脳内モデルの更新が行なえるか、とも言い換え得る。世界をモデル化することで普遍性⇨時間からの自由を獲得しながら、実世界での変化にしたがいモデルを変更し続けること。そのバランスが現実世界をサバイブする鍵になる。そしてこれはアンドロイドに限ったことではなく、人間でも

同じである。脳内モデルと現実がそぐわない人を、妄想癖の強い人と言う。

今のところ僕たちは有限の時間に生きており、時間とともに変化する世界の中で変化に対応していかなければ、生物としての身体すら維持できない。ただし、今後さらに技術が進み、無機物の身体に脳をダウンロードできるようになって死ぬ心配がなくなれば、意識のあり方もずいぶん変わってくるだろう。そう僕は考えているのだが、それはまだ先の話である。

(池上高志・石黒浩『人間と機械のあいだ 心はどこにあるのか』)

注 クオリア：感覚

問一 — ①とはどういうことか。

- 1 自己の言葉は他者に対する言い訳であふれているということ
- 2 自分がどのような存在かを自身に問いかけているということ
- 3 自らの存在を確立するために自分自身を肯定するということ
- 4 自己を認識する際に他者の言葉を受け入れないということ

問二 — ②に入るのはどれか。

- 1 独立
- 2 対立
- 3 倒立
- 4 乱立

問三 — ③とはどういうことか。

- 1 記憶とは現実世界を時系列的にまとめあげた仮想概念であるということ
- 2 記憶とは断片的な出来事の関係性をもとに構築されたものであるということ
- 3 記憶とは時間から切り離されることで現実を混乱させるものであるということ
- 4 記憶とは時間とエビデンスとが結びついた途端に失われるものであるということ

問四 — ④の対義語はどれか。

- 1 永遠
- 2 平凡
- 3 進化
- 4 特殊
- 5 具体

問五 — ⑤とはどういうことか。

- 1 あらゆる事象をまとめ、技術革新によって三次元世界を乗り越えていくこと。
- 2 様々な情報から傾向や特徴を見出し、抽象化することで理解しやすくすること。
- 3 人工的な意識を作る過程で生じる問題を典型化することで、解決するということ。
- 4 時間という制約からの解放を時間概念を捨てることで実現し、世界を単純化すること。

問六 A・Bに入る語を本文中から抜き出せ。

問七 本文を二つに分けた場合、後半はどこからか。初めの五字を抜き出せ。

問八 I・IIに入るものをそれぞれ選べ。同じ番号は一度しか使えない。

- 1 それゆえ
- 2 まして
- 3 いわんや
- 4 つまり

問九 a) d)に入る語の組み合わせはどれか。

- | | | | | | | | |
|-----|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 a | 客観 | b | 主観 | c | 客観 | d | 主観 |
| 2 a | 主観 | b | 客観 | c | 主観 | d | 客観 |
| 3 a | 客観 | b | 客観 | c | 主観 | d | 客観 |
| 4 a | 主観 | b | 主観 | c | 客観 | d | 主観 |

問十 本文の内容に合うものはどれか。

- 1 世界全体を時間固定的に把握するためには、昆虫と同じような全方位への視野を、持続的に保ち続けなくてはならない。
- 2 アンドロイド開発の最終目標は、「自己意識」の獲得という高い壁を乗り越えた、人間に近い存在を生み出すことである。
- 3 自己意識とは、合わせ鏡に写った己の姿に、現実世界を様々なレベルで行き来する自分をつなぎ合わせたものである。
- 4 電子回路のメモリーは、オンとオフを交互に行うことによって、人間の記憶と同じ働きをするメカニズムを実現した。

【二】次の文章を読み、後の間に答えよ。

①たとえ話をしよう。

あじさいという花について考えてみる。②大きな薬玉くすたまの様な固まりがいくつもある。色は白や紫、薄いピンクなど、徐々に変わる。あじさいという花が自分にはどう見えるか。

③あじさいの

A

 て

B

 勝ちけり

随分前の拙句だが、色のせいではない。一つの固まりの中にまた、いくつもの小さな花があつて、その数が増えるほど淋さびしさが勝ってしまう。集まれば集まるほど淋しい。

それは人に似ている。大都會けんごうの喧騒けんざうの中を歩いていると、人が多ければ多いほど、孤独を感じてしまう。このたくさんの人々の中で私はひとりといった思いを抱く。群れば群れるほど淋しさは増す。

淋しさをまぎらわそうと群れているのに、逆に淋しさが増してしまう。

あじさいを書くには、④孤独感こどくかんを書くしかない。

私の実家のあつた等々方とどろきの家は近所の人から「あじさいの家」と呼ばれていた。垣根には白い小さなつるばらがからまつてはいたものの、庭のほとんどを占めていたのは、大木の他はあじさいであった。なぜその頃あじさいが好きだったのか、大失恋をした頃だったからか、それとも一時心を寄せた事のある年上の男と一緒に鎌倉のあじさい寺に行ったせいだったのか。

北鎌倉の小さな寺、明月院はあじさい寺と呼ばれて、時期になると観光客の長蛇の列が続くというが、私が放送の仕事をしていた頃には訪れる人も少なかった。誘われて寺の入口にある細い階段を昇ると、両側に青紫のあじさいが列つらなっていた。私たちは無言でその階段を昇った。

その男はひねくれた所のある人で、私はひそかにある詩をもじって、「まがりくねった男が一人……」などといっていた。

明月院に詣でた後、彼は言った。「先に行くよ」

私はしばらく間をおいて石段を降りはじめた。ひよる長い背が通りすぎるたび、両側に群れ咲いたあじさいが、なまめいて見えた。私の知らない秘密を共有するかのよう……。

彼には想い出があったのだ。一人置いてけぼりにされた淋しさに胸が張りさけそうになりながら、後を追った。あじさいは無表情に私を迎えた。彼に見せたなまめかしさなどかけらもなかった。その数が無数であればあるほど、私は孤独を胸に持ち続けなければならなかった。

あじさいについてのエッセイを頼まれた時、私はその事を書いた。

人によってはあじさいの固まりは華やかに見え、各地のあじさいの名所が流行はやっているであろう。それとも淋しいからこそ、たくさん群がって見に行くのであろうか。

あじさいは私を拒絶する花だ。だからこそあじさいに惹かれる。なぜ私を拒絶するのか。 magari くねった男に見せた媚こびにも似たなまめきは何なのか。その人とあじさいの共有している秘密とは何なのかを知りたいと思う。ひとり孤独に陥った私の感情とは何であったか。それは小さな嫉妬ではなかったのか。

自分の心を掘り下げていってみると、古代遺跡を発掘するのに似て思わぬものにつきあたる。壊れぬように土を払ってみると、そこには見た事もない自分がある。気付いた事のない感情がある。

それを言葉にして表現する。「あじさい」という題のエッセイには、私の心の奥の、目に見えないものを表現する。目に見えないものを目に見える言葉を借りて表現する。私はかつて明月院で味わった孤独感を書かないわけにいかないだろう。あじさいとその男との秘密と、拒絶された私の姿を描く。初めて気付いた私の心に巢食う嫉妬の感情にも触れないわけにはいかない。

あじさいの花言葉は、私にとって「嫉妬」なのだ。

嫉妬などあろうはずがないと思っていた。⑤ 《掘り下げるうちに私はそこに到達してしまった。

真実を言葉にして書く事で確かめ定着させる。後でもう一度土をかぶせてしまおうにしても。

ものを書く事は恥をかく事だと、常々私はいつている。あじさいのたとえでも、私は自分の心の奥に巢食っている嫉妬に気付いて、と

まどった。認めるべきか否か。文字として定着させていいものかどうか。目を覆って知らん顔をして通り過ぎたかった。そうすればあじさいと淋しさだけの美しい話ですむかもしれない。それでは嘘をついた事になる。

気付いてしまったのだ。私の心の奥に隠した醜さを。それをさらす事は、恥をかく事だ。読んだ人たちが何と思うだろうか。私の人柄まで誤解されてしまうかもしれない。書かねば嘘になる。表面だけのきれいな事だ。表面だけで済んだ文章は決して人の心を打たない。共感を得ない。思い切って恥をさらしてこそ真実が感じられるのだ。

自分を偽らずに見せるためには、決断が必要になる。書かねばならぬと決断する潔さを持たなければ、文章は書けない。愚痴や不満をぶつけてみても仕方ない。いいわけなど誰も聞きたくはない。

あじさいがなぜ淋しく感じられるのか、表面的な言葉を並べてみても虚しいだけだ。嫉妬といういやな感情を持った自分をいくらいいわけしてみてもはじまらない。

堂々と恥をかく事が必要である。

日本文学の最高峰といわれる『源氏物語』^⑥。この物語は堂々たる恥の文学である。光源氏という一人の美しく才能溢れる男を主人公に、彼の女遍歴という恥を描いていく。光源氏は、時の天皇と桐壺の女御という、数ある女性の中で寵愛を得た女との間に生まれた。

決して位の高い女ではない。その母桐壺の女御の面影を求め、光源氏は、父帝の愛する藤壺とひそかに契り^{ちぎ}を結び、罪の子を作ってしまう。父帝はその事を知らない。その事が後に自分の妻女三宮^{おんなさまのみや}と柏木との密通というしつべ返しをうける運命のいたずらを含めて、

⑦ □ 沙汰には出来ない恥の連続なのである。

光源氏の数多くの女遍歴は、最初の女、藤壺の面影を追い、満たされぬ思いに次々と別の女と関係を結ぶ恥多い人生でもある。

その事が実に堂々と描かれている。平安時代は一夫多妻、妻問い婚が当り前だったとしても、紫式部は、ごまかす事なく、正面からその事を描いている。あまりに堂々としているので、私たちは只々^{ただだ}圧倒されるのである。

『源氏物語』はたくさん作家が現代語訳を試みている。与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、近くは瀬戸内寂聴などそれぞれ特徴があり、その作家の源氏になっているが、当然ながら原文が一番堂々としている。

⑧ □ 修飾やきれいな事ではなく、すばつと言いつつ潔い。恥をかいて恥を知らない文章、^⑧とも見える、その態度こそ、書くという

事なのだろう。

外国語訳も多く出ているが、日本人の作家の訳よりもストレートで、原文に近いという。作家個人の思い入れがない分だけ、直じかに心に響いてくるのではないだろうか。

紫式部は、あの時代にあつて書くという事は、恥をかく事であると知っていて、実践している事に驚かされる。

その後、ずっと女性の作家が出られる社会状況になく、明治になって樋口一葉⑨が出る。一葉は貧しさの中でまっすぐに庶民の生活を見つめ、堂々とその事を文章にした。人に威張れぬ暮らしの中の恥を文章にした。男女の仲にしても下町の男女の感情を生き生きと筆にした。その正面切った無駄のない文章、きれいな事ではない真実の味わいがある。

(下重暁子『人生という作文』)

問一 — ①はどのようなことを伝えるための例か。

- 1 恥ずかしがらず文章を書き続けることで文章力が向上するということ
- 2 心に響く文章を書くためには人との関係を大切にすべきだということ
- 3 ありふれたものと真剣に向き合うことで文章が味わい深くなるということ
- 4 良い文章を書くためには自分自身を見つめ直すことが必要だということ

問二 — ②と同じ種類の比喩が用いられているのはどれか。

- 1 授業が終わったら友人とファミレスでお茶しよう。
- 2 昨日から母は鬼のごとく怒っている。
- 3 猿も木から落ちるのだから気を引き締めよう。
- 4 趣味について語る彼女の目はキラキラと輝いていた。
- 5 若い時ほど朱に交われれば赤くなるものだ。

問三 — ③の A・B に入る語を本文中からそれぞれ抜き出し、俳句を完成させよ。

問四 — ④の説明はどれか。

1 自分を置き去りにして男があじさいの方に進んで行ったため、あじさいだけでなく男からも拒絶されているという疎外感を覚えた。

2 密かに慕っていた男があじさいを通して昔の恋人に思いを馳せている姿を見て、自分の恋が叶わないことを悟り、切なさを覚えた。

3 男の心を誘うように振る舞うあじさいが自分の知らない秘密を男と共有していることに気づき、のけ者にされているように感じた。

4 男とあじさいの出来事によって、結局人は分かり合うことができない生き物であることを知り、人が抱える本質的な虚しさを感じた。

問五 《 》 ⑤ 《 》に入る次の文を適切な順番に並び替えよ。

1 嫉妬という、避けて通りたい嫌な自分を見てしまった。

2 男とあじさいが親密にならずき合おうとも、私とは関係ないと思っていた。

3 それが真実なのだ。

4 どうやらちがったのだ。

問六 — ⑥と同時代に成立した作品はどれか。

1 『万葉集』 2 『平家物語』 3 『徒然草』 4 『奥の細道』 5 『枕草子』

問七 — ⑦の □ に漢字一字を入れて熟語を完成させよ。

問八 — ⑧ に入る語はどれか。

1 投げ遣り 2 反面教師 3 開き直り 4 他人行儀 5 言い掛かり

問九 — ⑨が著した作品はどれか。

- 1 『坊っちゃん』 2 『高瀬舟』 3 『トロッコ』 4 『たけくらべ』 5 『人間失格』

問十 本文の内容に合うものはどれか。

- 1 「まがりくねった男」は筆者より年上で、筆者と同様に放送関係の仕事に就いていた。
2 『源氏物語』の堂々とした文章を外国語に訳すことは難しく、様々な作家が苦勞している。
3 筆者は自分の人柄を誤解されることを恐れるが故、ありのままの自分を文章に書くことにしている。
4 人は一人ぼっちになって初めて、大人数の時には気づかなかった孤独に直面するものである。
5 古代遺跡の発掘とエッセイの執筆は一見関係なさそうに見えるが、その実似ているところがある。

【三】次の文章を読み、後の問に答えよ。

昔徳言といふ人、陳氏と聞こゆる女にあひぐしたりけり。かたちいとをかしげにて心ばへなど思ふさまなりければ、互ひに浅からず思ひかはして年月を経るに、思ひのほかに世の中乱れて、ありとある人、^②アもイもさながら山・林に隠れまどひぬ。さがたき親・はらからも四方^よにたち別れて、おのがさまさま逃げさまよへる中に、^③この人別れを惜しむ心誰にもすぐれたりければ、人知れずもろともあひ契りけり。「我も人もいづかたとなく失せなん後、おのづから世の中しづまりて又もあひ見る事ありなんものを、その程のありさまをばいかでか互ひに知るべき」と聞こえさするに、女の年ごろ持ちたりける鏡を中より切りて、おのおのそのかたがたを取りて、「月の十五日ごとに市に出だして、この鏡の半ばを尋ねさするものならば、必ずあひ見て互ひにそのありさまを知るべし」と言ひつつ、いといたううち泣きて別れ去りぬ。その後この夫恋しさわりなくおぼえていたづらに月日を過ぐすままに、「いかなる人に心をうつして契りしことを忘れぬらん」と、^④胸の苦しさをさへがたくぞおぼえける。

ます鏡割れて契りしそのかみのかけは^⑤いづちかうつり果てにし

かやうに思ひやりけるにしも、色かたちのなまめかしく華やかなるにやめでたまひけん、時の親王にておはしける人にかぎりなく思ひかしづかれて年月を経るに、^⑥ありしには似るべくもなきありさまなれど、この鏡のかたがたを市に出だしつつ、昔の契りをのみ心にかけて世の常は下燃えにてのみ過ぐしけるに、鏡の割れ持ちたる人として尋ねあひて、男・女のありさま互ひにおぼつかならず知りかはしつつ。女これを聞きけるよりおぼえず悩ましき心地うち添ひて、うつし心ならぬけしきを見とがめて^⑦あやしみ問ひたまふを、さすがに覚えてしばしば言ひまぎらはしけれど、強いてのたまはずればわびしながらありのままに聞こえさせつ。親王これを聞いたまふに^⑧御袖もしばりあへず、あはれにいみじくおぼされけるにや、装ひいかめしきさまに出だしたてて、昔の男のもとへ送りつかはしたるに、徳言かぎりなくうれしきにつけてもまづ涙ぞ先立ちける。

契りおきし心にくま^⑨やなかりけむふたたびすみぬ中川の水

いやしからぬありさまを振り捨てて昔の契りを忘れざりけん人よりも、親王の御なさけはなほたくひあらじや。

問一 — ①とはどういうことか。

- 1 偶然出会ったということ
- 2 共に暮らしていたということ
- 3 言い寄っていたということ
- 4 一緒に出掛けたということ

問二 — ②の ア・イ には対義語が入る。適切な語を二つ選べ。(順不同)

- 1 高き
- 2 すさまじき
- 3 美しき
- 4 いやしき
- 5 若き
- 6 恐ろしき

問三 — ③とはどういうことか。

- 1 徳言は陳氏以上に別れることを悲しみ、誰よりも嘆いたということ。
- 2 陳氏は徳言との別れを悲しみ、誰とも会わなくなったということ。
- 3 徳言も陳氏も別れを悲しむ気持ちが誰よりも強かったということ。
- 4 徳言は陳氏と別れる悲しみを誰にも明かさなかったということ。

問四 — ④はなぜか。

- 1 陳氏と別れてしまったことを後悔しているから。
- 2 陳氏が約束を破ったのを他の人から伝え聞いたから。
- 3 陳氏に会えない間に他の人に惹かれてしまったから。
- 4 陳氏が心変わりしたのではないかと不安になったから。

問五 — ⑤とは何か。

- 1 人影
- 2 月影
- 3 幻影
- 4 遺影
- 5 面影

問六 — ⑥とはどのような「ありさま」か。

- 1 偉そうに思いやりがなくなったさま
- 2 豊かで幸せな生活を送っているさま
- 3 病気でやつれてしまったさま
- 4 見違えるように美しくなったさま

問七 ⑦ に入る人物を本文中から漢字二字で抜き出せ。

問八 — ⑧はどういう様子か。

- 1 あきれ果てた様子
- 2 同情している様子
- 3 腹立たしく思っている様子
- 4 うらやましく感じた様子

問九 — ⑨は何のことか。

- 1 悩み
- 2 偽り
- 3 憐あわれみ
- 4 恐れ
- 5 弱よわみ

問十 本文において「鏡」はどのような役割を果たすものか。

- 1 昔を思い出させてくれるもの
- 2 離れている相手の心を映すもの
- 3 売って生活の足しにするもの
- 4 再会のための目印となるもの

【四】 次の傍線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直せ。

- 1 合唱コンクールでシキをする。
- 2 新生活にあたりケンヤクを心がける。
- 3 厳かな雰囲気の中、式がとり行われた。
- 4 長年のコウセキが認められ、昇進する。
- 5 書道の授業でハンコをホる。
- 6 猛暑で自然と汗が滴る。
- 7 鎌倉時代に建立された寺院。
- 8 新しい条例は四月一日にシコウされる。
- 9 軽々しく金銭のタイシヤクをしてはならない。
- 10 入学後はクラブに入ることをススめる。